

小学校外国語教育の授業運営に必要な音声知識について
—学級担任が自信を持って英語の授業ができる発音を身に付けるために—

谷本 みか（千葉経済大学附属高等学校）

はじめに

文部科学省は2017年3月に新しい学習指導要領を公示しました。小学校英語が教科となり、小学校中学年に年間35時間の「外国語（英語）活動」が必修化、高学年に年間70時間の「外国語（英語）」が教科化されました。今年度と来年度（2018年度～2019年度）は新学習指導要領移行措置期間となります。それに伴い、2012年に作成された文科省作成高学年用共通教材『Hi! Friends!』、または2018年度から使用が開始されている文科省作成移行期共通教材中学年用『Let's Try!』と高学年用『We can!』、どちらかが採用され、学級担任による英語の授業が4月からすでに展開されています。

小学校英語の教科化にともない、文科省は2017年3月に小学校外国語（英語）コア・カリキュラムを公表しました。小学校教員養成課程では、①「外国語（英語）の指導法」と②「外国語（英語）に関する専門的事項」の2科目が必修化となります。「教科に関する科目」にあたる②「外国語（英語）に関する専門的事項【1単位程度を想定】」は、「小学校における外国語活動・外国語の授業実践に必要な実践的な英語運用能力と英語に関する背景的な知識を身に付ける」ことが全体目標とされています。

この全体目標は、二つの一般目標に分けられています：

- （1）授業実践に必要な英語力
- （2）英語に関する背景的な知識

「（2）英語に関する背景的な知識」は、さらに細かく4分野の到達目標に具体的化されています：

- 1）英語に関する基本的な事柄（音声、語彙、文構造、文法、正書法等）について理解している
- 2）第二言語習得に関する基本的な事柄について理解している
- 3）児童文学（絵本、子供向けの歌や詩等）について理解している
- 4）異文化理解に関する事柄について理解している

この4つの到達目標のうち、どの到達目標が学級担任として一番ハードルが高いのでしょうか。筆者は、数人の身近な現職の小学校教諭にインフォーマルな会話内で質問しました。圧倒的に多かったのが、「正しい発音が出来ない」という「音声」に関する答えでした。白井（2008）によると、第二言語習得における音声面は、母語の干渉が非常に強い領域だと考えられています。日本人にlとrの発音が区別できないのは、母語の日本語が影響しているせいです。発音だけでなく聞き取りも難しいということも、多くの研究で明らかになっています。lとrの発音を区別させるような訓練をすると、弁別能力が向上するという研究もたくさんあるそうです。実際、私たちは中学生でlとrの発音を習っています。知識としては誰でも知っていることですが、実際の会話の中で意思伝達を目的とし

て使うとなると、難しくなるということです。

これらの意見を参考にすると、これから現場に出る小学校教員養成課程の学生に、上記の基本的な事項のうち「英語に関する基本的な事柄（音声）」の知識と、英語使用者として標準的な発音ができる力をつけるのが特に重要だと考えます。文部科学省は（2017）、小学校外国語科（英語）では音声に関して「特定の地域やグループの人々の発音に偏ったり、口語的過ぎない、いわゆる標準的な発音を指導するもの」と定義しています。この2つをしっかりと習得することで、学生は自信を持って英語の授業ができる指導者になると考えます。

本稿では、これから現場に出る小学校教員養成課程の学生が、効果的に「英語に関する基本的な事柄（音声）」の知識と、英語使用者として標準的な発音を習得できるプログラムを考察します。まず、小学校教員養成課程に入学している学生が高等学校英語教育で学んだ音声知識や受けた発音指導を整理し、その不足を明らかにします。その上で、教員養成課程における音声知識と標準的な発音の習得につながる効果的なプログラムを考察し、提案することを目標とします。

1. 高等学校教科書で扱われている「音声に関する基本的なしくみ」

2014年に公示された現行学習指導要領は、「外国語（英語）」はコミュニケーション能力と、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能重視の特徴を持つ学習指導要領です。学習指導要領内で音声知識は、「音声に関する基本的なしくみ」として取り扱われています。必履修科目に設定されている「コミュニケーションⅠ」では、「2 内容」の項目で配慮するものとして「ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。」をあげています。高校生が「コミュニケーションⅠ」に引き続き履修する「コミュニケーションⅡ」では、「2 内容」で配慮するものとして「ア 英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら聞いたり話したりすること。」をあげています。学習指導要領の変化にともない、上田・大塚（2011）は、教科書内に音声に関するページや説明が増加したと報告しています。それ以前の教科書と比較すると、音声指導が充実している教科書であると言えるでしょう。

本稿では、2018年発行の三省堂『CROWN English Communication I』と『CROWN English Communication II』を分析対象に選択しました。多くの進学校といわれる高等学校がこの教科書を採択しており、小学校教員養成課程に進学する生徒もこの教科書で勉強している可能性が高いと考えます。また、筆者は10年以上にわたって三省堂『CROWN』シリーズで授業を展開しており、この教科書を使用した指導経験は豊富です。

『CROWN English Communication I』

『CROWN English Communication I』は「Sound Studio①」～「Sound Studio④」の項目で、英語の音声に関する知識と標準的な発音を扱っています。標準配当時間はそれぞれ0.5時間です。

「Sound Studio①」：・音の連結

- ・音の脱落
- ・音の同化
- ・子音連鎖

「Sound Studio②」：・文の区切り

- ・発音のヒント [✕][i✱] 及び [◆][u✱]の発音

「Sound Studio③」：・強勢とリズム

- ・発音のヒント 日本語の子音よりも強く発音される英語の子音 [p][t][k]

「Sound Studio④」：・イントネーション

- ・発音のヒント 母音が単独でしっかり発音される形と、文中で変化して発音される場合。

ここから、教科書が取り上げている個々の項目について、詳しく説明します。

「Sound Studio①」：

(1) 音の連結

つながった音 (liaison) とも呼ばれます。先行する語の語末が子音で、続く語の語頭が母音のとき、つながって発音されることがあります。

教科書は2つの例文を扱い、連結が起きているところに∪のマークをつけ、文を音読するように指示しています。

(1) When∪I was young, I often went skiing.

(2) Please take∪off your shoes here.

(2) 音の脱落

落ちる音 (elision) とも呼ばれています。先行する語の語末が子音で、続く語の語頭も同じ子音であるとき、先行する語の語末の子音が脱落することがあります。ゆっくりと発音している時は起こりませんが、会話など自然なスピードで発話するときに起こります。教科書は2つの例文を扱い、連結が起きているところに○で囲み、文を音読するように指示しています。

(1) John is a goo(d) driver.

(2) Mary loves her re(d) dress.

教科書には記載されていませんが、指導書には、音の脱落は全く同じ子音でなくても、性質の似た音が重なっても起こる場合があることが書いてあります。

this shop / this ship

また、t と d は発音するときの口の構えが同じなので、この二つの子音が重なるときも、音の脱落は起こることも書いてあります。

sit down / next day / good morning / good teacher /

(3) 音の同化

くっつく音 (assimilation) とも呼ばれています。となりあった音の影響で、ある音が別の音にかわってしまうことがあります。先行する語の語末の有声音が、続く語の語頭の無声

音に影響されて、無声化する現象があります。

教科書は2つの例文を扱い、同化が起きているところに◡のマークをつけ、文を音読するように指示しています。

(1) I have◡to go shopping now.

(2) Of◡course, you're right.

これも教科書には記載されていませんが、指導書には、先行する語の語末の音と、続く語の語頭の音が結合し異なる別の音になることがあることを書いています。

(1) He told◡you that, right?

(2) You should do what◡you can do.

(3) Would you turn◡on the TV, please?

(4) 子音連鎖

子音がと子音がつながって発音されることを子音連鎖と呼びます。英語では子音連鎖はごく普通に現れます。これに対して、日本語はほぼすべての子音に母音が結合して発音される言語です。そのため、日本語を母語とする学習者にとって、子音連鎖の発音は特に難しいとされています。

教科書では、子音の後に母音を挿入しないように注意しながら、語の発音をするように指示しています。

please / glad / pray / bright / stick / strike / strong / slow / click / climb /

「Sound Studio②」：

(1) 文の区切り

英文を音読したり黙読したりするときに、意味の区切りごとにポーズを入れて読むことです。フレーズ・リーディングとも言われ、英文の構造や特性を無視することなく理解ができるようになる技術です。

教科書では、以下の英文を適切なポーズを入れながら音読するように指示しています。その際、短めのポーズには1本のスラッシュ (/)、長めのポーズには2本のスラッシュ (//) を入れるように指示しています。

The students had seen so much suffering. // The pianist was able to see their suffering / with the eyes of his heart. // They enjoyed together in a song / to express their sorrow, / their courage, / and their hope for the future. //

『CROWN English Communication』シリーズは、副教材の『予習サブノート』に、あらかじめスラッシュで区切りが入った本文が準備されています。学習者は予習サブノートで音読練習をすることで、意味の区切りに慣れ親しむことができるように工夫されています。

(2) 発音のヒント [ʌ][i●] 及び [◆][u●]の発音

英語は母音の種類が日本語よりも多く、英語の地域差が発音上一番よく表れるのも母音だといわれています。標準的な母音の発音を身につけることで、いわゆるネイティブに近い発音に近づくことができます。ここでは、[ʌ][i●] 及び [◆][u●]の発音はどちらも音の長さの違いではないことを理解し、また日本語の[イ]や[ウ]の音と異なることも理解させるのが目的となっています。教科書ではそれぞれの音を使った単語のミニマルペアを、発音練習させています。

(1) [ʃ][i●] sit - seat, bit - beat, fit - feet

(2) [ð][u●] pull - pool, full - fool, look - Luke

指導書では、単語の発音練習だけでなく、これらの単語が実際に使われている例文を示し、文中で発音練習することを勧めています。

「Sound Studio③」：

(1) 強勢とリズム

英語では、2つ以上の音節があると強弱のリズムが生まれます。この強弱を意識して読んだり発声したりすると、リズムが生まれ、発音にもメリハリがつき、意味も理解しやすくなります。ここでは、マザーグース（イギリスの伝承童謡）の一説であるナーサリーライムを教材として、読みの練習をします。強く読むところ、それに比べて弱く読むところがあらかじめ●・で示されており、視覚で分かりやすいように表記されています。

Rain, rain, go away.

● ● ● ●

Come again another day.

● ● ● ●

Little Johnny wants to play.

● ● ● ●

この他に、語句を強勢とリズムに注意して音読練習させています。

(1) challenge - in challenge - He's in challenge.

● ● ● ●

(2) believe - believe it - I can't believe it.

● ● ● ● ● ●

(3) make it - you can make it - I hope you can make it.

● ● ● ● ● ● ● ●

(2) 発音のヒント 日本語の子音よりも強く発音される英語の子音 [p] [t] [k]

英語の子音のうち、破擦音を扱っています。英語の破擦音には[b] [d] [g] [p] [t] [k]の6つがありますが、ここでは無声音の[p] [t] [k]の3つを取り扱っています。この3つの子音は語頭の場合、日本語の子音よりも強く発音される傾向があることを学習者に理解させることを目標としています。

教科書はまず単語を発音練習しています。

[p] pen paper pig

[t] tea time talk

[k] kick kiss cat

そのあと、文中で現れる場合を練習しています。文中では、すべての破擦音を同じ強さで発音するのは不自然になることを確認します。語尾に来る破擦音や、前置詞 to 等は弱い音で読むことを確認し、練習する形になっています。

(1) Pat carefully picked a piece of paper.

(2) Tom went to town to drink some tea.

(3) Chris couldn't catch the train.

「Sound Studio④」：

(1) イントネーション

音声の点における英語と日本語の顕著な例に、強勢・リズム・そしてイントネーションがあげられます。音の高さの変動パターンを指し、特に文尾においてその特徴が現れます。

- 教科書では：
- 1) 平叙文（下降調）の例
 - 2) 疑問文（上昇調）の例
 - 3) 疑問詞を使った疑問文（下降調）の例
 - 4) or を使った際の例
 - 5) 列挙する際の例

そのほかに、同じ文でもイントネーションが違ふと文意が変わることも取り扱っています。イントネーションが文の意味を表す役割があることや、話者の態度や心理状態を示していることを確認し、普段からイントネーションを意識して発話、音読するような指導になっています。

- (1) He is an astronaut. (↓)
- (2) Is he an astronaut? (↑)
- (3) When did you first decide to go to Africa? (↓)
- (4) Where would you like to go (↓), to the movie (↑) or to the zoo? (↓)
- (5) They were tears of thanks for the help and support of his family (↑), teachers (↑), and friends. (↓)

続く練習では、(1) This is my book. (2) Jane couldn't go. を例文として、下線部の語に強勢を置きイントネーションを変えて読むことで、文意が変わることを考えさせています。

- (1) a. This is my book. (本であることを伝えている)
- b. This is my book. (私のものであることを伝えている)
- c. This is my book. (この本こそが私のものであることを伝えている)
- (2) a. Jane couldn't go. (単純に事実を伝えている)
- b. Jane couldn't go. (ジェーンが行けなかったことを伝えている)

(2) 発音のヒント

母音が単独でしっかり発音される形と、文中で変化して発音される場合を取り扱っています。be 動詞や、助動詞、冠詞などにおいて起こる場合が多く、教科書では be 動詞と助動詞を例として取り上げています。一般に平叙文や疑問文では弱く読むことを覚えさせるために読みの練習を入れています。

- (1) am → Im a student
- (2) are → You're a baseball player.
- (3) can → I can run fast. (下線部を弱く読む)
- (4) could → It could be a mistake.
- (5) should → You should see the doctor right away.

この練習の後に、文の音読練習が入っています。下線部を弱く音読するように指示されています。

- (1) How much does it cost?

(2) Tom is smaller than Jim.

(下線部を弱く読む)

(3) Come and see me soon.

指導書には、Yes や No で始まる応答文の時は強く読む場合があることを念頭に置かせるのがよいだろうと書いてあります。発音については特に、発音記号や理論で理解させるのではなく、ネイティブスピーカーの発音を例文とともに何回も聞かせてまねる指導が望ましいとしています。

『CROWN English Communication II』

『CROWN English Communication II』も『CROWN English Communication I』と同様に、「Sound Studio①」～「Sound Studio④」の項目で、英語の音声に関する知識と標準的な発音を扱っています。標準配当時間も同様に、それぞれ0.5時間です。

「Sound Studio①」：・音の連結

- ・音の脱落
- ・音の同化
- ・音読練習

「Sound Studio②」：・文の区切り

- ・音読練習

「Sound Studio③」：・強勢とリズム

- ・音読練習

「Sound Studio④」：・イントネーション

- ・音読練習

『CROWN English Communication I』と『CROWN English Communication II』の「Sound Studio①」～「Sound Studio④」の取り扱い内容と説明の難易度は、ほぼ同じです。異なる点は、『CROWN English Communication I』では母音[ʌ][i[●]]と[ɔ[◆]][u[●]]、子音[p][t][k]の発音練習が入っていましたが、『CROWN English Communication II』にはありません。その代わりに、『CROWN English Communication II』には各項目ごとに比較的長めの英文を使った音読練習が加えられていることです。

教科書で扱われている音声指導の内容を整理しました。『CROWN English Communication I』、『CROWN English Communication II』は、英語の音声の仕組みについて整理し、英語と日本語の違いに慣れ、発音出来るように工夫された内容であると思います。残念なことは、これだけの豊富な音声知識に配当されている時間が合計2時間であることです。英語特有の音声を理解し、正確に運用するには、あまりにも少ない時間です。毎回の授業には、様々な方法による音読活動、話す活動があります。「Sound Studio①」～「Sound Studio④」で英語の音声を学習し整理した後に、教師が各レッスンの音読練習で学んだ知識を意識しながら発音するように毎回の授業でこまやかな指導をすると、学習者により効果的に正しい発音が身につくと考えます。

白井(2008)は効果的な外国語学習法として、「発音・音声はまねることから」と書いています。

それから、発音については、個々の母音や子音に注意が行きがちですが、実際の母語話者にとってわかりやすく、不快に感じない発音という観点からいくと、イントネーションとかリズムの方が個々の音の発音より重要だという研究結果が大勢を占めています。昔、外国語をまねてというのが非常に上手な藤岡有弘という俳優がいましたが、彼はイントネーションやリズムをうまくまねていました。この「特徴をまねる」ことが、自然な発音習得には大事なのです。

『CROWN English Communication』は、『予習サブノート』にあらかじめスラッシュが記入された本文があり、文の区切りを目で見てまねやすくなっています。スラッシュに加えて、本文に音の変化や強勢・イントネーションが目で見えて意識しやすく、発音しやすいような表示があれば、学習者も音の変化や強勢・イントネーションをよりまねやすくなると考えます。教科書や副教材のさらなる工夫で、学習者がネイティブスピーカーに近い標準的な発音を目標として、習得することが期待できると考えます。

2. 小学校教諭に必要と考えられるが、高等学校教科書で扱われていない「音声に関する基本的なしくみ」

小学校新学習指導要領では、「外国語（英語）活動」及び「外国語（英語）」の目標及び内容において、「知識及び技能」に関する柱で：

「（１）外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする」

「（１）外国語の音声や文字、語彙、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語の違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。」と定めています。

小学校中学年では、大量インプットを与えることで、英語の音声やリズムに慣れ親しみ、何度も繰り返すことによって、英語の強勢やリズムに気づくようになることを目標にします。さらに小学校高学年では、慣れ親しんだ音声を知識として理解し、技能として使えることを目標にします。

小学校の指導者は、音声の仕組み・強勢・イントネーションの知識・技能を持ち、音声英語のプロになる必要があります。自信を持って授業展開するために、「外国語（英語）に関する専門的事項【1単位程度を想定】」内で「正しい発音」の練習と習得は最優先課題でしょう。

『CROWN English Communication I』と『CROWN English Communication II』の「音声に関する基本的な仕組み」の取り扱い内容を整理することで、小学校教員養成課程に入学する学生がすでに学んでいる音声知識について確認しました。取り扱い時間が少ないこと、教科書や副教材でのさらなる工夫の必要性を指摘しました。さらに、

- （１）教科書に発音記号の扱いがないこと。
- （２）発音方法の取り扱いが少ないこと。

この2点が筆者にはとても気になります。ここでは、小学校教諭にこの2つの知識がなくては外国語（英語）活動や外国語（英語）の授業展開が不十分になる可能性について考察

し、その理由を述べたいと思います。

(1) 発音記号

英語の発音は日本語と異っており、日本語にない音がたくさんあります。これらの音を習得するのに手助けになるのが発音記号です。発音記号を見ながら、ネイティブの発音を良く聞き練習すれば、音を効果的にマスターできると言われています。発音記号の読み方を習得すれば、英語の教科書や辞書の単語が正確に発音できるようになることから、発音記号を使って英語の発音を学ぶことを勧める本はたくさんあります。

筆者は、高等学校、大学で発音記号を学んだ経験があります。高等学校では、発音記号とその音の学習をしたものの、発音記号は正確に習得できませんでした。24個の子音の発音記号はマスターしたものの、26個もある英語の母音と対応する発音記号を覚えきれなかったためです。その経験から、筆者は発音記号の指導を高等学校の授業では取り入れていません。同様に、発音記号を使って発音指導をした結果多くの英語嫌いを産み出してきたという意見や、アルファベット読みにはじまり、大文字・小文字等を学習した後に50個の音声記号を学習することは中学生・高校生にとって大きな負担になるという意見もあります。

筆者は、「読めない単語は電子辞書に読んでもらいなさい。」と授業では学習者に指導しています。電子辞書は、ネイティブの標準的な発音を再生してくれます。電子辞書が普及している現状で、限られた授業時間を使って発音記号を覚える必要はないと考えるからです。手島良(2011)は以下のように書いています。

当然、「それでは、学習者は語の発音をどう知ればよいのか？」という疑問が起こるだろう。それに対しては、以下で述べるように、文字・綴りと発音の関係性についての指導を充実させ、綴りから発音は(おおよそ)推測できることを理解させつつ実際の発音は「電子辞書」に発音させて確かめるよう指示するのが合理的であると考え。もちろん、学校の教室であれば、指導者が発音して手本を聞かせ、それを学習者が聞き取って真似すればよい。

筆者もこの意見に賛成です。中学生・高校生には発音記号の読みの習得より、文字・綴りと発音の関係性についての知識を充実させ、綴りから発音を推測できる力を付けるたいと考えます。家庭では電子辞書が手本になり、教室では指導者が手本になります。発音記号を指導しないからこそ、指導者が正しい発音をすることが必須です。中学校・高等学校で発音記号を指導しないなら、教員養成課程では英語の音声構造知識と発音記号の扱いを充実し、基礎知識を持ち正しい発音の出来る英語教師の養成を図るべきです。

中学生・高校生に対する発音記号の指導を、肯定する意見もあります。長谷川恵洋(1997)は以下のように書いています。

筆者は、中学・高校での英語の授業にはおおむね満足していたが、音声教育についてだけは不満であった。日本語とはまったく異なった音声の世界が存在しているのに、それについて何の説明もなく、ただ習うよりも慣れよという授業であった。筆者はそれが不満かつ不安だったので、自分で書店に行き、英語の発音について書かれた本を買ってきて勉強した。それは、それぞれの発音記号をどんな口の形で発音す

れば良いかを口の断面図入りで説明した小冊子だった。なにぶん中学生だったのですべてが手探りで苦労した。学校で少しでも教えてもらえたらそんな苦労はせずに済んだと思う。

たとえば [ɹ] は、舌の最頂点の位置と口の形に基づいて設定された母音体系の中で、アとエの中間に位置する、アでもなくエでもない、日本語には存在しない1つの音の要素である。また [ɹ̥] は弱音節に現れる曖昧な母音で、英語の強弱のリズムとの関係を抜きにしては語れないものである。こういうことは説明してもらわないと、ただ漠然と英語を聞くだけでは何度聞いても把握出来るものではない。我々日本人には苦手だとされる [v] や [θ, ð] の発音も、摩擦音の概念とか口の形などについて具体的に説明してもらった方が、早く確実に習得できるであろう。

このように、長谷川は中学校から発音記号の指導をするべきと主張しています。発音の違いに意識を向け、口の形やリズム、概念まで含めて具体的に説明があると早く習得できると自身の経験から結論づけています。いずれの立場においても、教員養成課程では発音記号を使用した音声指導の訓練を受けることが必要であるという結論になります。

(2) 発音方法

筆者が高校で学んだ教科書には、発音する時の口の形や舌の位置を側面から見たイラストが教科書の随所にありました。発音する時の口の形や舌の位置は文章でも解説され、音読練習があったのを覚えています。最終的に、すべての母音と子音を学習しました。しかし、そのイラストや説明で発音を効果的に習得できたかと問われると、しっかりと身に付いた感じはしません。なぜ身に付かなかったのか、その理由を高校時代を振り返って考えました。発音の授業が、いつも口蓋図や口の形の詳細な説明から始まること、その後 rock と lock のような単語のミニマルペア練習だけが活動内容として設定されていたこと、そのため毎時間が単調でモチベーションが上がらなかったのが原因だと考えます。

『CROWN English Communication I』では、「発音のヒント [ɹ̥][i̥] 及び [ɹ̥][u̥] の発音」と「発音のヒント 日本語の子音よりも強く発音される英語の子音 [p][t][k]」の2カ所で、発音方法を取り上げています。「発音のヒント [ɹ̥][i̥] 及び [ɹ̥][u̥] の発音」には、口蓋図はなく、口の形を文章で短く的確に説明しています。sit - seat, bit - beat, fit

- feet のミニマルペア、pull - pool, full - fool, look - Luke のミニマルペアが発音練習として載っています。これだけなら10分で終わる内容でしょう。「発音のヒント 日本語の子音よりも強く発音される英語の子音 [p][t][k]」では、英語の子音は日本語の子音と比較して強く発音される傾向があること、特に語尾の[p][t][k]は対応する日本語の子音より強く発音されるので注意が必要であることが説明されています。ここでも口蓋図はなく、口の形や息の出し方についての記述もありません。発音練習として、[p][t][k]で始まる単語が[p] pen paper pig, [t] tea time talk, [k] kick kiss cat、3つずつ載っています。それに加えて Pat carefully picked a piece of paper. や Tom went to town to drink some tea. Chris couldn't catch the train. の3つの文を発音に注意して読む練習が載っています。

教科書はコミュニケーション重視で作られています。音声練習のみに注目した場合、単語のミニマルペアの練習と、音を多く含む例文の練習だけに終わっています。この練習

方法では、音の違いの一点に意識が向きやすくなる一方、コミュニケーション要素のない発音練習で終わってしまっています。コミュニケーション活動の中で使われていないことが残念であり、筆者の経験や動機付けの点からも、学習者にしっかり身につくか疑問が残ります。また、教科書ではこの7つの音しか取り扱っていません。これは26個の母音のうち4個に、24個の子音のうち3個にしかすぎないのです。あまりにも少ない感じがします。

可能であれば、母音・子音の全ての音を学習させたいと考えます。個々の母音・子音の発音練習、単語の発音練習だけでなく、意味のあるコミュニケーション活動の中で音に意識を向けて練習するのが理想だと考えます。教科書で使用する単語でミニマルペア練習を行い、教科書に載っているチャンツやライム、普段使うことの多いクラスルームイングリッシュの形で練習すれば、音だけでなく意味にも注意と意識を向けて練習できるでしょう。学生には授業が単調になりにくく、英語学習の動機付けにもなり、効果が出やすくなると予想します。

授業で段階を踏んで音声に関する知識を学びます。教科書の読みやクラスルームイングリッシュやスモールトークで発音練習をおこない、標準的な発音に慣れていきます。音声知識の習得を目標に設定するのではなく、自信を持って英語らしい発音でコミュニケーション活動が出来るようになることを目標にするプログラムを理想とします。

3. 教員養成課程における「英語に関する基本的な事柄（音声）」の知識と英語使用者として標準的発音の習得につながるプログラムの提案

ここまで1. 高等学校教科書で扱われている「音声に関する基本的なしくみ」において、学生が高等学校で学んだ音声に関する知識を確認しました。さらに2. 小学校教諭に必要と考えられるが、高等学校教科書で扱われていない「音声に関する基本的なしくみ」において、音声に関する知識や練習の不足を考察しました。これをもとに、ここでは教員養成課程における音声知識と標準的発音の習得につながるプログラムを提案します。

本プログラムでは、『小学校英語はじめる教科書 外国語科・外国語活動指導者養成のために コア・カリキュラムに沿って』吉田（監修）小川・東（2017）を参考に、音声指導項目を以下の4項目に分類しました：

- (1) 標準的な発音（母音・子音）と発音記号
- (2) 語と語の連結による音の変化
 - 1) くつつく音
 - 2) 落ちる音
 - 3) つながった音
- (3) 語や句、文における基本的な強勢
- (4) 文における基本的なイントネーション

この4項目を組み合わせ一日15分、10回のプログラムを作ります：

回数	学習項目
Day 1.	(1)
Day 2.	(1)

Day 3.	(1)
Day 4.	(1)
Day 5.	(1)
Day 6.	(1)
Day 7.	(1)
Day 8.	(1) + (2) + (4)
Day 9.	(1) + (2) + (4)
Day 10.	(1) + (2) + (3) + (4)

「(1) 標準的な発音(母音・子音)と発音記号」は7回にわけて段階を踏み、標準的な発音(母音・子音)と発音記号を学習します。ここでは、英語の音と綴りとの関係を整理するフォニックスの学習も取り入れます。フォニックスは音声を文字につなげる指導ですが、フォニックスを学ぶことは発音練習にもなるからです。文科省作成移行教材には、フォニックスは入っていません。さらに、高学年から始まる外国語(英語)科の指導にも発音と綴りを関連付けた指導は入っていません。しかし指導者として、発音と綴りの関係について基本的な知識を身につける必要があります。フォニックスはある程度の音声知識がある方が理解しやすいと言われていますが、フォニックスを理解することが逆に音韻認識を助けると考えます。

フォニックス指導には様々なアプローチがあります。子音から学習していくアプローチもありますが、文科省作成移行期共通教材高学年用『We can! 1』のJingle一覧(94～95ページ)はアルファベットの文字順に学習していくアプローチになっています。学生の動機付けになるように、『We can! 1』、『We can! 2』のJingle一覧を使い、掲載されている1文字1音の母音・子音と、『We can! 1』内で使用されている単語を練習に使用します。学習の順序については、『POP-UP ENGLISH FUN WITH PHONICS Vol.1』(神田外語キッズクラブ)を参考に、指導法として日本人に最も習得しやすいと考えられる順序にしました。

『We can! 1』、『We can! 2』の「Alphabet Jingle一覧」は、「A / ʌ // ʌ / apple」のように音素表記になっています。このプログラムでは、学習者が音素表記より発音記号を目にする機会が多いであろうことから、あえて発音記号を使用して「aの[ʌ] apple ant」と表記しました。音素記号と発音記号には、明確な違いがありますが、発音記号の方が音素記号と比べてきわめて普遍的な性質を持っているので、他言語の音声とも比較することが出来ることから、発音記号を使用しています。

Day 1. 子音 (pの[p]、 bの[b]、 tの[t]、 dの[d])

練習単語: [p] pen pig pizza
[b] bear banana
[t] ten tiger tea
[d] dog donut

Day 2. 子音 (cの[c]、 gの[g]、 cの第2音[s]、 gの第2音[ɝ]、)

練習単語: [c] cat cow corn

[g] goat gorilla gum
[s] ceremony celebrate
[dʒ] giraffe gentle

Day 3. 短母音 (a の [ʌ]、 e の [e]、 i の [i]、 o の [ɔ]、 u の [ʊ])

練習単語： [ʌ] apple ant
[e] elephant egg
[i] ink iguana It's
[ɔ] orange ox omlet
[ʊ] up umbrella under

Day 4. 子音 (m の [m]、 n の [n]、 f の [f]、 v の [v])

[m] milk monkey melon
[n] net notebook
[f] fan fish food
[v] vest vacation vegetable

Day 5. 子音 (s の [s]、 z の [z]、 l の [l]、 r の [r])

[s] sun salad soccer
[z] zoo zebra
[l] lion lemon
[r] racket rice rabbit

Day 6. 子音 (y の [j]、 w の [w]、 j の [dʒ]、 h の [h])

[j] yo-yo yak yellow
[w] watch wolf water
[dʒ] jam jacket juice
[h] hat horse hot dog

Day 7. 子音 (k の [k]、 q の [kw]、 x の [ks])

[k] king koala kiwi fruits
[kw] queen quail question
[ks] box fox six (x は語尾にくることがほとんど)

Day 8. ~Day. 10

(2) + (3) + (4) で練習するクラスルーム・イングリッシュやスモール・トークに入っている音を意識して発音練習

「(2) 語と語の連結による音の変化」を身につけると、英語らしく発音できるようになります。「発音」というと、英語の母音や子音の個々の音に慣れることがまず頭に浮かびますが、英語の音の特徴を身につけるほうがより英語らしくなります。

文科省作成移行期共通教材中学年用『Let's Try! 1』、『Let's Try! 2』と高学年用『We can! 1』、『We can! 2』で使用するクラスルーム・イングリッシュやスモール・トークの表現で練習します。

Day 8. くっつく音

英語授業内で使用するクラスルーム・イングリッシュやスモール・トークには、多くの音の連結が起こる表現があります。生徒に指示を行うクラスルーム・イングリッシュで練習します。

Stand up, please. / Take off your shoes. / Put it on. / Stop it. /
What are they? / That's all for today. / Look at the TV.

Day 9. 落ちる音

ゆっくりと発音している時は起こりませんが、会話など自然なスピードで発話するときに起きます。あいさつや指示に使用するクラスルーム・イングリッシュで、自然なスピードで練習します。

It's a cold day. / Take care. / Sit down, please. / Next day. /
Good morning, everyone. / Good job.

Day 10. つながる音

音のつながる表現はたくさん使用します。ここでは～you でつながる表現を取り上げ、you を「チュ」「ジュ」と発音すると英語らしくなることを強調します。

I have to go. / Of course. / Nice to meet you. / Don't you? /
I want you to read. / And you? / What would you like? /

「(3) 語や句、文における基本的な強勢」は、チャンツなどの練習を通して強勢とリズムを体得することで、体得出来ます。文科省作成移行期共通教材高学年用『We can! 1』に出てくるチャンツで練習します。この2つのチャンツは、2人の掛け合いになっています。強勢とリズム練習だけでなく、意味のあるコミュニケーション活動に少し近い形になっていると考えます。ペアで楽しく練習出来ることが目標です。

Day 10. チャンツ

『We can! 1』 Unit 5 She can run fast. He can jump high.

Can you run fast?

● ●

No, I can't.

● ●

Can you jump high?

● ●

No, I can't.

● ●

Can you dance well?

● ●

No, I can't.

● ●

Then, can you sing well?

● ●
 Yes, I can.
 ● ●
 I can sing well and fly high.
 ● ● ● ●

『We can! 1』 Unit 6 I want to go to Italy.

You can see the Eiffel Tower.

● ●
 (A great tower.)

● ●
 You can eat a croissant.

● ●
 (A yummy croissant.)

● ●
 You can buy a chocolate.

● ●
 (A nice gift.)

● ● ● ●
 Enjoy your trip and have a good time.

「(4) 文における基本的なイントネーション」も、クラスルーム・イングリッシュやスモール・トークで練習します。強勢・リズム・そしてイントネーションに意識を向け、文尾における音の高さの変動パターンを出します。

Day 8. 平叙文 (下降調)

This is your new textbook. (↓)

Draw a line between the room number and the character. (↓)

Day 9. 疑問文 (上昇調)

Do you know those pictures? (↑)

Can you tell me? (↑)

疑問詞を使った疑問文 (下降調)

How do you like it? (↓)

What do you see in the picture? (↓)

Day 10. or を使用する文 (下降→上昇→下降調)

Which is Hana's room (↓), number one (↑) or two? (↓)

What sports do you want to watch, Kosei (↓), athletics (↑) or judo? (↓)

列挙する文 (上昇→上昇→下降調)

You can eat many kinds of curry. For example, vegetable (↑), chicken (↑), beef

or seafood. (↓)

I'd like grilled fish (↑), miso soup (↑), fruits (↑), rice (↑), green tea (↑) and salad. (↓)

4. おわりに

以上、教員養成課程における音声知識と標準的発音の習得につながる一日15分、10回のプログラムを提案しました。このプログラムで、文科省作成移行期共通教材中学年用『Let's Try! 1』、『Let's Try! 2』と高学年用『We can! 1』、『We can! 2』で使用するクラスルーム・イングリッシュやスマール・トークの表現を練習し、母音・子音を「Alphabet Jingle一覧」を使って練習しました。

この10回のプログラムには、文科省作成移行期共通教材を指導するのに十分な音声知識と練習を入れました。しかし、このプログラムでは全ての英語の母音・子音が入っていません。二重母音や子音連鎖等の音は文科省作成移行期共通教材にJingleとしての扱いはないこと、またこれらをすべて含めると10回のプログラムに収まらないことが、入れられなかった理由です。入っていない音声知識には、高校の教科書に既習しているものもあることから、学生が高校までに学習している英語の知識で補えればと考えます。

このプログラムでは、学生は個々の母音・子音の発音練習、単語の発音練習するだけでなく、意味のあるコミュニケーション活動の中で音に意識を向けて練習することも目標に加えました。発音練習には、教科書に載っているチャンツやライム、普段使うことの多いクラスルームイングリッシュを使っています。練習に使用した言語材料が限られていることから、意味のあるコミュニケーション活動が展開できるのか、疑問に感じられるかもしれません。しかし、限られた語彙、短い文、文法的に単純な文でも、発声した単語がしっかりと英語の音の特徴を持ち、はっきりとした強勢・リズム・イントネーションをともなって発せられていれば、発話者の意志を表現することが出来るはずです。このことを学生に伝えることで、学生は自信を持って小学校の授業に臨めます。文科省作成移行期共通教材を授業教材に使用することで学生の学習への動機付けを強化し、ペア活動やグループ活動を多く取り入れ、意味のあるコミュニケーション活動により近い音声の授業を目指します。

今後は、このプログラムを運用しながらさらに改善を加え、より効果的な音声プログラムを学生に提供できるよう引き続き研究していきます。

(参考文献・資料)

・吉田研作(監修)小川隆夫・東仁美(著)(2017)『小学校英語 はじめる教科書 外国語科・外国語活動指導者養成のために一コア・カリキュラムに沿って一』

mp i 松香フォニックス

・白井恭弘(2008)『外国語学習の科学―第二言語習得理論とは何か』 岩波新書

・バトラー後藤裕子(2015)『英語学習は早いほど良いのか』 岩波新書

・鷲見由理(2000)『英語の発音が正しくなる本』 ナツメ社

- ・長谷川恵洋（1997）『英会話と英語教育』 晃洋書房
- ・町田健（2004）『ソシユールのすべて 一言語学で一番大切なこと』 研究社
- ・池田周「小学校英語で知っておきたい「音⇄文字」指導のABC第6回最終回 小学校外国語科における文字の音の扱い」『英語教育』 March 2018 p.52～p.53 大修館書店
- ・語学教育研究所「英語教育 研究と実践」『英語教育』 August 2018 p.76～p.77 大修館書店
- ・小泉清裕 「小学校英語指導のはじめの一步 第4回 小学校英語に適した学び方」『英語教育』 July 2018 p.52～p.53 大修館書店
- ・柳田綾（2017）「効果的な音声指導項目の提示とは一高等学校英語教科書の分析から」『JSLA Volume 9』 p.79～p.92
- ・上田洋子・大塚朝美（2013）「中学校英語検定教科書における音声指導項目の分析一新旧学習指導要領での扱いの変化について一」『大阪女学院大学紀要10号』 p.1～p.15
- ・手島良（2011）「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について一発音指導の現状と課題一」『音声研究 第15巻第1号』 p.31～p.43
- ・検定教科書（2018）『CROWN English Communication I』 三省堂
- ・検定教科書（2018）『CROWN English Communication II』 三省堂
- ・文部科学省 新学習指導要領対応小学校外国語教材（2018）『Let's Try! 1』、指導編『Let's Try! 1』
- ・文部科学省 新学習指導要領対応小学校外国語教材（2018）『Let's Try! 2』、指導編『Let's Try! 2』
- ・文部科学省 新学習指導要領対応小学校外国語教材（2018）『We can! 1』、指導編『We can! 1』
- ・文部科学省 新学習指導要領対応小学校外国語教材（2018）『We can! 2』、指導編『We can! 2』